

「慰霊碑に想う」

倉町 秋次

昨年はいよいよ望みの慰霊碑が、見事に建立されてお互いに嬉しいことでありました。相携えて国難に赴く雄姿が、巨匠の腕で具現され、破邪の怒りを愛国の微笑で包み、きつと結んだ口許には、昔日の覚悟のほどをありありと偲ぶことが出来ず。

戦後、私は済みきった眸をした若人に接することの少ない嘆きを繰り返してきましたが、今、この像に接して、久々に心の渴きを忘れることができ、魂が清められる感さえ覚ゆるのであります。しかし、式当日の殿下のお言葉にもありましたように、立派に慰霊碑は建ったが、慰霊の道は、ここで終わったというのではなく、寧ろ真の慰霊の道はここから始まると言った方が適切であるかもしれません。私たちは、口を開けば英霊の慰霊だ、顕彰だと言いがちであります。が一体、どうすることが真の慰霊であり、顕彰につながるのでしょうか。

予科練とは、その性質において、その規模において全く異なりますが、古来、白虎隊や赤穂義士の名は今日も世に喧伝されています。四十七士や会津の少年たちが、長く世の共感を受けているのにはいろいろ理由もありましようが、

責任の完結と共に全員がごとごとく散ってしまったという潔さ、悲壮美、壮烈さといったものが、世人の心を打ったことも見逃すわけにはいきません。

予科練の場合は、「海原にはた大空に散華」した殉国の英霊、並びにこの英霊たちと相連れ立って護国の盾となり無敵の空威を発揮した生存者諸君の、当時に於ける声価は既に決定しておりますが、同時にここに生存者諸君の未来への可能性というものが残っております。即ち定着された評価に更に輝きを加えることもできれば、またその逆の場合も可能であるのであります。

千年後の史家の評価、真の予科練の声価の最終決定は、生存者各位の今後の行動如何によって左右されることも少なくないと思えます。思いをここに致せば、時としては敗戦を知らずに散った英霊たちを羨ましくさえ思うこともあります。

かつて諸君は、大空の決戦に臨むとき、お互いの心中に於いて、英霊たちとどのような約束を取り交わしたであろうか。「あとをたのむぞ」「よし引きうけた」この、祈りにも似た無言の誓約は、戦いの結果によって変更を許されるものであったろうか。英霊たちが二つとなき己の生命に代えて願ったもの、それは戦いそのものではなく、戦いを越えた彼方に輝く平和の灯で

あった。その灯をつかえるためには、戦火を越えなければならなかった。真に、人間の宿命のかなしさであります。

が、今日私たちは、その貴い代償によって、平和の灯を手中にすることができました。二度と私たちは、この灯を手離してはならない。どのような仕事、どのような行動、どのような考え方も、私たちの日常生活の総てはこの貴い平和を守り貫き、英霊の慰霊と顕彰につながらな

いものはない。
要は徒に大言壮語することではなく、着実に実行することにあると信じます。今や慰霊碑の建立を契機として、英霊たちが一瞬の火花と献げた赤誠を、生ある限り、各自の職域に於いて燃やし続けることこそ、真の慰霊道であるとの念を新たにします。

(この一文は、昭和四十二年四月創刊の機関紙「予科練」の第一号に掲載されたものです。)